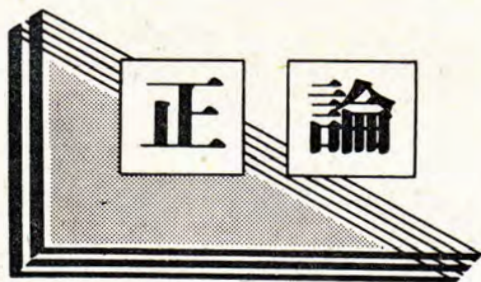


(正論) 混迷深まる中国社会主义 鄧小平=趙紫陽体制の問題点 (産経新聞-1987.11.10)



鄧氏の権威と恣意に依存

注目の中国共産党第十三回党大会が終った。去る八七年一月の胡耀邦総書記解任のドラマに見られた改革派と保守派・原則派の路線闘争を背景にしていただけに、この大会が改革派を中心とするリーダーシップの若返りと開かれた中国共産党への第一歩を印したことは、当然注目してよいだろう。

だが、そこは、さまざまの矛盾や鄧小平以後の時代への不安を誘う数多くの問題点が存在する。

まず第一点は、中国の政治が鄧小平氏個人の権威と恣意にあまのりにも過度に依存している点である。まず党大会に先立つ中央総会で鄧小平氏は党の正式の序列を無視して議長団の中央に座り、中国共産党が鄧主任の党である実質を見せつけたのであったが、党大会が採択した「中央委報告に関する決議」では、「大会は、鄧小平同志の第十一期三中全会以来の党の路線の形成と発展のなかでおこなった重大な貢献を高く評価した」として、あたかも決然とした時代を想わせる鄧小平ワンマン体制を公認

した点である。しかも、鄧小平は他の長老とともに党のトップリーダーシップを形づけては離れたとはいえず、彼が党中央軍事委員会主任という軍権を維持するため、まさに鄧小平個人のポストのために従

# 混迷深まる中国社会主义

## 鄧小平=趙紫陽体制の問題点

来の党規約を改正したのである。このような現実がありながら、中国共産党が民主化と政治改革に向かって前進したなどとはしていないのかどうか、私は大いに疑問をもつ。つまり中国共産党は、一個人の今

後の生命が決定的に重要になるという政治的悪循環から依然として断ち切れていないといえよう。ここに鄧小平以後の時代への不安があることはいうまでもない。

建国後の中国共産党は、八大大会(一九五六年)の劉少奇、九大大会(一九六九年)の林彪、十大大会(一九七三年)の周恩来、十一大会(一九七八年)の華国鋒、十二大会(一九八二年)の胡耀邦と党大会で政治報告をおこなった最高リーダーがすべてにちい失墜しないは批判された

東京外語大教授 中嶋 嶺雄



解任に大きな役割を果たした鄧力群、胡喬木氏らの古参の保守派イデオログが後退したのみかといえよう。原則派の重鎮・陳雲がその老齢と病弱にもかかわらず、最近の中国共産党でむしろ中央委員会よりも重要な役割を果たしていた中央顧問委員会主任に鄧小平の後任として席を占めたことは、陳雲の意志というよりは、陳雲をいた

性化政策と対外開放政策の二本柱は万全とはいえず、拜金主義の蔓延や所得格差の増大、供給と消費のアンバランス、インフレと物価上昇、外貨不足など鄧小平改革の弊害も深刻化して、前途はなお多難だといえよう。

「社会主义初級段階」の怪

第三点は、今回注目された、当面の中国が「社会主义の初級段階」という規定である。この規定は第一に今世紀末一人当りGDP1000米という「四つの現代化」の当初の目標が依然として増大する人口圧力もあって達成できなくなりつつある現実、第二には経済活性化のために私営経済や私営企業を公認し、商品経済システムを導入しなければならなくなりつつある現実、第三には本年一月から施行された中華人民共和国土地管理法もたらす農村の人民公社解体後の実質的な土地私有化への傾斜を合法化するために、つまり現実を理論を整合させるために「社会主义の初級段階」という発展段階論に逃げこまざるを得なかったことを意味している。

という歴史をもっている。それだけに鄧小平以後の時代の趙紫陽総書記がどのような命運になるかは、やはり定めがたいといわねばなるま。

路線闘争はまだ決着せず

第一の問題は、実務的な官僚層やテクノクラートが大量に登場してきたにもかかわらず、中央リーダーのなかでは依然として改革派と原則派の路線闘争が決着していないと思われる点である。今回は、胡耀邦

それら原則派の力は依然としてあまのりがないように思われる。トップ・ファイブの政治局務委員を見てみても、趙紫陽、胡啓立の改革派、李鵬、姚依林の原則派と中間派の番付が成り立っているとも見ることができ、この点では二・五対二・五の勢力比といえる。従って、鄧小平=趙紫陽体制の将来は、まさに当面の経済改革の成否にかかっているといわねばなるまい。

肝心の経済改革に関してみると、経済活性化政策と対外開放政策の二本柱は万全とはいえず、拜金主義の蔓延や所得格差の増大、供給と消費のアンバランス、インフレと物価上昇、外貨不足など鄧小平改革の弊害も深刻化して、前途はなお多難だといえよう。

(なかしま・みねお)